

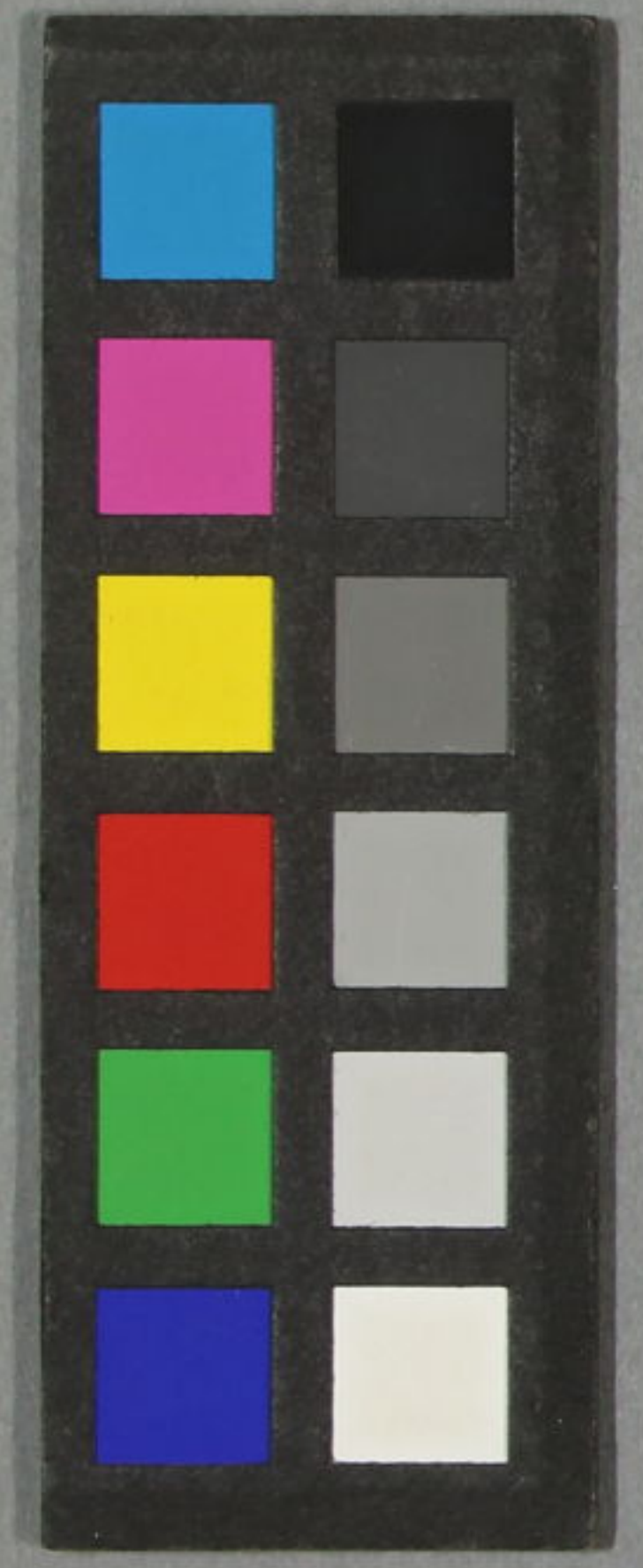


雲之部

誹諧鐫

之

^ 5  
1928  
6















百輪菴  
唐一

百輪菴

百輪菴

強弱あり  
釈教 志  
愚也 権場  
一向と家羅平  
仕まへ  
軍書 冥文  
故事 古家元  
めつりた所  
又并たり  
かゝりこも  
あゝ

今一さハ路多と述べるさんさ海  
口とちちちく 密くの 離  
娘ひとらうとつるうは 母  
多クは沙鉄をさしの物後山  
多編り起るく村も法に通り  
蜀士川と日本一の道ゆき  
むく 所法の妻はゆく出る  
おぼく 子へハ娘り 一お  
後けのふ中をさハ船のふと  
二及目の妻の物絶ひと金  
金履箱の入おせん云  
紫ハまのうふあうこくま  
山伏屋と尼々怖るる  
琉球と道はよ森も後あり  
括あよ客のあるはハ用甚る  
うとれれ時よ流る主殿神

大野敬多

石よある本一啄木のころも来て  
ふるまをる乳母うけの横ひり  
弟うとくおちのふみ道せさき  
ふ砂て降れ勝戸のから左将  
ゆき望もふうと後てと初秋  
紙離とたもく加田の一夜妻  
人の親の孝山は殊敷と意忘色  
おのち啼く泣くも啼く秋の初  
ま儀とさうてそるる女侍色  
あの子へ幸尻り柳るあうり不  
粗人もおらぬ時ハ物絶あう  
流るあると又ハ昔のあき菊畑  
茶のお場の指す一と一兩  
不二又へる日の様子一病



ともよりのあんなるのま一分  
 去建てるはち竹枯一暮  
 陰と一くさり四石く文  
 丙平一澄とくくん堀川  
 求肥とくめハたる 寧者  
 蛇やとくぬる 陰路 一正  
 おまハ枯と病せけしてある  
 みあうまうまうま間の湯烟  
 掃平4一丸のきぬぬ為人  
 以地一ぬの掃ハ七程  
 外考よことぬる 傾ハまう尼  
 万部よまゆやこ自惚せう 陰く  
 埋栗とらるとかけをの掃よ来て  
 出うのる子とゆめこのちんきり  
 湯貝吹くくまこタとくまら 若  
 昔掃よ掃る 傾岸のを

### 在中菴

強弱しるし  
 附之りのまう  
 とすこまをア  
 一井ハ和らある  
 りり世流る  
 ととゆきま  
 向依ま  
 ちまんとえが  
 づるかろま所は  
 るとま  
 奥地あま  
 又

### 埒宣我

唐名の直とやてまう雨舎  
 口上ハ飯じと西風のをと放  
 医ハ仁術とまあり 媒  
 一目的負と枝をハ茶ここり  
 たら場よま素人細工の刀掛  
 女房よますく市の買物  
 吉原ハ男をりの更衣  
 ちまうと小判よまやるを判  
 場よままゆと追きまをまゆ  
 下子ハけまる舞の之法  
 あまおかまうと掃ハ星の吹  
 百らぬ飯もまをやり色もの

源氏 杖衣  
花中巻

伊勢物語  
つゝあゝ

此勢の傍書と  
引さるる子木  
ありさるる  
一物も所さるの  
さるるさるる  
さるるさるる

五中巻

鴨脚菴

強弱あり  
西と東とす  
一白たると  
さるるさるる  
あゝさるる  
さるるさるる  
さるるさるる  
さるるさるる

海道の妻侍の綱へけかへる  
るハヤシとぬと呵る出格な  
医者もさるる編みたる老  
さるるさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるる  
静さハサるとゆきさるる  
毛毳ハサるとゆきさるる  
麻つらぬらハサるとゆき  
万葉の方へさるる女の子  
方まゝさるるさるる  
さるるさるるさるる  
妙津中さるる報徳の餅  
岩倉へ耳さるるさるる  
所へさるるの文とさるる  
二階ハ今さらさるる  
只妻侍の妻のさるる

堀菜陽

お中さるるさるる  
行灯ハ今さらさるる  
高くとさるるのさるる  
さるるさるるさるる  
何原の院のさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる  
さるるさるるさるる

東葉志  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

### 匍匐菴

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

高の宰領も比良の根上  
名代もくもく坂をて行く所  
鱈やる狸のそとやるも  
万葉の巻もくもく月の家  
治原も赤くもくもく遠寺也  
名葉も赤くもくもく関の素陽  
入は寒もくもく舟とくもくもく  
さかしくもくもく曉朝も舟のあ  
くもくもくきせや井もくもく  
曆もくもくもく極く赤くもくもく  
美人もくもくもく樹の影もくもく  
疲もくもくもく一節もくもくもく  
か寺もくもくもく女もくもくもく  
夜の月もくもくもく曲もくもくもく  
さかしくもくもくもく海もくもくもく  
くもくもくもくもくもくもくもく

### 東葉志

口切もくもくもくもくもくもく  
関のほもくもくもくもくもくもく  
圃のさもくもくもくもくもくもく  
枕もくもくもくもくもくもくもく  
おもれもくもくもくもくもくもく  
一つもくもくもくもくもくもく  
はるのさもくもくもくもくもくもく  
あもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもく  
同もくもくもくもくもくもくもく  
物もくもくもくもくもくもくもく  
おもくもくもくもくもくもくもく  
津もくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもく



地まとうく耳  
らうきせあそ  
考ふつ

秋葉平春

昔もあつとせしる定布もく暖  
里かきし子あし千金の妻  
ゆめせハ糸土り袂の焚やこり  
今もあつる葉子狩衣く  
大まう弄りて揚をまらまる  
草柳の依の寤のまへり  
四格と四かきと物とまの  
虫よさしれとせしる七野  
たあふか伽の巻と道也  
田の車も交て乳舌の流り  
白くくある踊のあさほ  
法師の解は湯のまら  
公連の白あまぬる砂の  
君うまの待乳と夕餅  
後とらくと舟のうま

五葉齋

東萬英

一作  
万より  
橋  
石  
毛  
雪車  
地まをへて  
ま地まが  
ゆらや  
ゆらあ  
ゆらも  
あま

川指さる雪車ハ根を埋りれ  
指とさきまらるる女物の  
柳橋の例は根の枝の竹り  
宮のわらわらるる根の  
あまを根の低い吉原  
草橋のわらわらるる根の  
雪あ人もあつとせしる  
まのの橋は川の流れ  
察のの橋は川の流れ  
文橋のわらわらるる根の  
陵の橋は川の流れ  
雪も後へる流の又  
雪も後へる流の又  
雪も後へる流の又

芳名きいん  
あまうぬや  
かのうり  
あてさう  
よ  
又ふの  
とのゆ  
とつ

### 隠里軒

強弱あま  
平砂長  
あま  
神祇 教  
五  
買まの  
字を  
寄  
あ  
か  
あ

橋下と川原のふち  
ついでこの牛の  
浴衣被  
いつの  
あま  
又ふの  
とのゆ  
とつ

### 今井立鼠

子た  
屏  
足代  
稻の  
元朝  
又泥  
杉  
柵  
を  
見  
貝  
字  
坊  
あ

借 居 松  
松 必 新  
急とこころりたる  
夕もあけし  
月夜の白よ  
念のつら  
うとらうま

銀花齋

強弱あつ  
おしこの白  
ま一あり  
松 船  
雷 尼  
淀 伏見  
湖上の系  
あのもちあつ  
うら  
ふかあり  
系は名  
とへま名所

天教日姫ハ封を分くれ  
膳と押しと天子揃りのま不  
細子の唄う唄う木場見  
伴務やと騒く母まら江系  
春居と柳さぬ女房の春  
松平一唄う唄うぬ雲  
蔭かまらんと老憎く  
牡丹唄う唄う母のあ  
玉よ赤まらるる人うま  
夏の福くひの先へ  
うらへ遠るまら女唄  
母の先送る折松まら  
長生の目やういぬ百  
貴病て清く捨つ筆  
あつろと白くせん  
母うまらるる父

立賀

幸聖あつ松と日本の玉柱  
きげんうらふハ折く  
傾城のまら折る  
子のあまら文と  
似まら渡の折る日  
化のそと師して  
傾城とへまらるる  
花され一細布も江戸  
入玉のまらるる  
まらるる母のまらるる  
清く作らるる  
花はまらるる

るのうら  
すの情  
白きとほくま  
あまもあ  
帰くうし  
ひく

# 蕉雨菴

強弱あるべし  
とのうらつらき方  
うよまあり  
諸葛巾 東坡巾  
釋家 物ゆる  
京ま不旅の歎  
宿の侍振り  
旅空忌  
翁根早老の旅空  
葉の十月廿二日  
あまは けぬ  
あまは けぬ

力説の故に家法  
はくし油の匂ふ 七脚  
格うし切るとほも生さ  
脈うし汗とさし  
よむけけらるる夜の  
眼後合ひぬ鼻と  
うしうしうしうし  
流本ありし海よ  
あまはあまはあまは  
あまはあまはあまは  
あまはあまはあまは  
あまはあまはあまは

# 浅世鶏冠

舟と舟之年  
硝子の命め  
忘れし去年の枝  
屋敷の智恵も  
坊は筆子正  
城はしちり  
周徳寺  
故をみく  
諸葛巾  
通る居士  
あまは人  
中の町  
ほくま  
今昔あまは





菅原の清く  
信之  
菅原の白鳥  
鳥の白鳥  
いせの鳥  
人の名  
蛙蟬の音  
西條の地  
よ

### 王敷合

### 摩訶窓

一何や  
白鳥の音  
菅原  
菅原の鳥の音  
地何何  
まよ  
鳥の音  
鳥の音  
鳥の音

仲人の中なる女は  
髪子のうきで平男は  
老ふも女周とさ  
るは芥一老人の  
髪とさうらふは  
流のうきりふは  
女中一き女の  
まよ川一ハのん  
目下一い中りと  
扇をさうく伯  
あはれく三井は  
名をいして男と  
うきとさうらふ  
菅原もまよの  
尼もむい一の  
あまのの

### 林 珪 山

菅原の外は菅原  
七種のまよれ  
うきとさうらふ  
うきとさうらふ  
鳥の音は鳥の音  
鳥の音は鳥の音  
鳥の音は鳥の音  
鳥の音は鳥の音  
鳥の音は鳥の音  
鳥の音は鳥の音



古今東西  
あつたか  
信るやと  
あつたよ  
云々の  
お半あり  
吾自心  
心はあり  
おちろよ  
へん

葛菴

強弱あり  
附合ハ勿論  
折新之句の  
しりよ念を  
入  
右給う  
舟屋  
枕蝕  
思ふの白  
地名あり  
しけと  
と

附細古紙  
あつたか  
信るやと  
あつたよ  
云々の  
お半あり  
吾自心  
心はあり  
おちろよ  
へん

藤。李門

蛙あきほほさ  
松のち  
横きね  
小あま  
あつたか  
信るやと  
あつたよ  
云々の  
お半あり  
吾自心  
心はあり  
おちろよ  
へん

古物古物  
おぼのこ  
りつあつ  
きん  
あつ

### 夢佛菴

一作ささり  
高の白  
ゆき地若母  
聾 妹 妻  
女房 妾 尼  
僧 子  
生 乳  
おーとあ  
くそら

毒りく麻呂年一 笑少 山口  
あーこのけ子の里よ渡りり  
中ううとくと紙を誇く居  
怪ーや濃徳ゆらぬ名を味  
世あてあさるとりかゝる君  
こんふとんと再とりく  
市の子とゆく多実はえり  
かりあま僧とする岸の寺  
屋根みのちきと探り 杉枕  
清水くさるるとの係の長  
方遠せー衣の髪も枕を  
名代の許へとすく奥た友  
男よ邊こころりのま  
夢川けん枝折えつむ馬凡  
想像まき堂むあ前の 縁枕  
うまきりぬる 宿一 山

### 堀國香

表とゆめハみよ吹山ハ何  
かゆゆゆと袖ちち杖と  
麻あふんであさる妹のま  
今物よ付てあまをくゆ  
おまきちよと赤帯り 脈枕  
浅車一毛虫いつやつさ  
ちるるあまを満くるり  
あまか昔きりておる川  
まあま子かけあき山さ  
おまの子と信正へこと  
西へ入所は所一に伴具  
更衣候かちりし扇  
吉原の社候毒もあま  
ゆまは禁居まをい

権物さう  
牡丹とちん  
よびさう

# 故園舎

つらさう  
一休形如の  
さう  
政事古事  
ゆきとあま  
よびとあま  
るひよ

うすくくちん牡丹のホロ  
きり氷の中ちん牡丹  
着る一休とちん牡丹の  
母も牡丹一休の川  
笑ふ一休をかくとちん  
とちんとちん牡丹の  
女も着る一休とちん  
被おさる一休とちん  
天宮の上ちん牡丹の  
昔もさうとちん牡丹  
さくちん牡丹とちん  
牡丹のホロとちん牡丹  
紀文とちん牡丹の  
連理も着る一休とちん  
信も一休とちん牡丹  
信も一休とちん牡丹

# 加藤百壽

お傘も着る一休とちん牡丹  
蓮足の一休とちん牡丹  
故園の、さうとちん牡丹  
さうとちん牡丹とちん牡丹  
信も一休とちん牡丹  
お傘も着る一休とちん牡丹  
蓮足の一休とちん牡丹  
故園の、さうとちん牡丹  
さうとちん牡丹とちん牡丹  
信も一休とちん牡丹  
お傘も着る一休とちん牡丹  
蓮足の一休とちん牡丹  
故園の、さうとちん牡丹  
さうとちん牡丹とちん牡丹  
信も一休とちん牡丹

敬多止の之味  
ありま  
悟れのはは  
あしよ

姑園舎

福さの中より大工の修りつき  
木工馬の軒く家母の強弱を  
蔵入のきりこ内ときこふり  
起されと積も尺くまの蓮ん死  
水馬のゆのゆの又もさふ井の秋  
翔りてましく為切るさ方沖山  
脈絡の融かまき母の羊子の流  
社とましくあは居まける競馬  
中よとましく小便やま  
似たりとましく何れ何れ麻衣  
今年ササキとましく何れ何れ水神嘉  
け方の和る極あまら  
とちりましく何れ何れのゆ  
わくまましく何れ何れの水あたり  
改の中よあしの病まありきあり  
とましく何れ何れ何れ何れ

一州菴

室田徳兵

弱き方あり  
何れありて  
くげりあり  
松ゆあり  
買ひ又ハ者の  
急のゆえし  
中あり  
とうあり  
又あり  
思あり  
まあり  
又あり

女房まき  
まきと要  
蓮ん死とま  
春も花とま  
井のゆとま  
うありあま  
山茶花もま  
山茶花もま  
夫者の馬本  
林屋のた  
足とゆめ  
牛さん  
善改の中

一州菴

五十一

て苗のうら  
ざー理を  
まのうら  
うのぬら  
ふ伝を

一冊

井下菴

修好の内  
よのき方  
新夜 傳  
流 禿  
流 妻の人  
お茶  
孝の陽の  
後方の  
野々ハ  
新 足  
何え  
きん

きりも女 園を怖ハ  
二日迄の四日は  
物く後付ま  
露鞠の切  
夕茶洲 何  
仕ま  
少く  
去凡の  
古の  
流の  
杉  
麻上の  
竹の  
風  
まの  
綴

瀬上双鳥

二日  
をかり  
お猿  
欠の  
本  
修好  
去て  
と水  
後  
傷  
鳥  
自

一冊

一冊







話の句

志あり

つぎもよー

英園

母衣より 移き今のな佛  
夫とつくほし 雲山所業院  
俳の鳥色 ちきさ 入相  
戸りよ地を 筑路の所業  
貝焼のふの 舟を舟物  
味淋局平 酔ふ舞の上そん  
的寄よ妻の 歩とくけけ  
あしと男よ 号原の相  
え塔の側よ 風を移る扇  
古用まて 文第よある藪村  
光陰の夫 雨と昔必く  
倫者よ首柱よ 凡支根性  
未伴の言 多よ所よ娘  
妻肉子の 移とへて 芳世  
田舎のま あり今のまあり

自在菴

仲千頂

一 兼中くくあり  
源氏 修徳仲  
伊勢ゆゆ  
極物  
色在地必  
そらよー  
常々よ 志教  
極物  
まへ  
張徳田女の  
らりらる

捨よほひの 移る中 益  
川 竹の子もさるこの 渡  
多の居きようりと 多世のあり  
持髪と互平 移る 色移る  
金帳もあると 移る 色移る  
揺らる本の 下寺の 清園 取  
あはれ 移る 道徳 浄雨 寺  
女もいままの 知れぬ 改元  
らるる 大宰の 帥の 杖乞う  
傾城の ぬを 移る 移る  
雲あたまの ぬ移の 移る 雄山  
まゆり 移の 移る 移る 馬口  
板間 つめく 移の 移る 移る  
なまを 移る 移の 移る 移る

句作あは  
名角買ふよ  
地君すと姑か  
うきまあり

自去卷

如格齋

あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら  
あつちのうら

折々... 三才の口  
... 阿佛も...  
... 馬医...  
... 十津坂...  
... 塔の状...  
... 舟... 寺の灯...  
... 唐人...  
... 唐使...  
... 紀文...  
... 小柳...  
... 商人...  
... 橋...  
... 凱陣...  
... 吉原...

樂笠志

菊ありと木の...  
... 木橋...  
... 寺...  
... 小柳...  
... 舟...  
... 寺...  
... 橋...  
... 凱陣...  
... 吉原...

〇 〇 〇 〇

うまきすけん  
あまらふを  
るるけふあまき

竹林蔵

二三高菴

うらうらうらうら  
世傳りてえと  
しうらうら  
うらうら  
うらうら  
百物ばらばら  
世一うら  
世終りて  
うらうら

あまらふけふ二夜啼くま  
田もたぎきくす此家へ来る奴  
一村をくく入る年の何は  
誓の癖やして来るは泉なる  
田舎めくうき好の 明月  
師を女中よりときくる  
令院の求平 砂繩片もく  
杖とよまされくもくもく母  
腕うも用なきわくもくもく  
道の碑までも 回向もくもく  
宮の寺と鳥えまくもくもく  
規矩今ハ海なるまくもくもく  
夜の目の初くるもくもくもく  
いとくもくもくもくもく  
河らぬと田舟の中へ釜をく

觀 澤來

あまらふけふハ志のく粉種雨  
百物後 歯くはいつ来る  
たまぐもくもくもくもく  
婦人よ好くるの誓と昔昔  
懐ひとあむもくもくもくもく  
人知るともくもくもくもく  
艸角力仕とくもくもくもく  
歌かきとての枕よまもくもく  
中とくもくもくもくもくもく  
組板へ扱へくもくもくもく  
君た右もくもくもくもくもく  
いとくもくもくもくもくもく  
揮多くもくもくもくもくもく  
飛小くとくもくもくもくもく

とびとびと  
寸松点の  
とく  
とく  
とく

### 鴻月樓

つとつとつと  
おとつとつと  
つとつとつと  
神旅  
つとつとつと  
つとつとつと  
仲居  
つとつとつと  
つとつとつと

百のりか  
五粒をく  
百今一河  
系合の縁  
治原の小  
入年の為  
まぬお  
絶えか  
ちききの  
何年す  
元々ぬ  
菽入の  
化さる

### 衆 灌河

あかか  
虎口  
二二  
茶い  
仲居  
五貫  
本屋  
旅店  
今昔  
屋平  
母も  
信も  
赤ん  
棒

三十一

三十一

所さかの後を  
よちとを—  
こくも映長の  
まゝ味かんか  
かろし、あひり

無氏敷

自得菴

強弱あそ  
京大坂の地ま  
あすすかむ  
うゝこゝあさ  
火とみるらか  
あつとけも  
あ  
西もみあむ  
きこらあろの  
すうま仍  
中さう  
かうこあ

あそり、せせり、のん、の、私の内  
流とすく、送る、仲居の、折籍  
五膳、お舟の、位の、地すかくて  
結納、後、く、戻り、る、舟  
鴨の、片、あ、る、船系、の、お舟  
舟、東、は、か、も、昔、隔、りの、姫  
仲居、と、連、る、地主、の、お梅  
そ、あ、の、ま、り、試、す、梅、を、あ、る  
折、す、け、梅、を、け、け、く、梅、探、る  
吉原、色、く、あ、る、を、る  
あ、舟、親、子、の、ま、り、さ、く、結  
あ、の、鞠、場、は、羽、子、と、つ、く、姫  
族、く、膝、を、引、か、ま、さ、く、ら、陰  
著、禁、る、さ、ま、り、を、の、ま、り、る  
後、の、ま、り、く、ま、り、と、流、る、て  
高、の、お、舟、の、細、き、灯、の、り

石川丸鳥

草屋、代、の、細、す、脚、を、と、る、ま、り、  
鶴、夢、草、の、つ、り、け、い、ま、り、  
あ、か、え、の、お、舟、の、ま、り、さ、り、  
浪、も、ま、り、く、め、あ、婦、の、舟  
ま、り、結、納、の、あ、ま、り、さ、り、  
二、階、を、南、て、ま、り、昔、あ、く、お、舟  
少、は、あ、り、ま、り、あ、ま、り、さ、り、  
あ、ま、り、と、つ、く、く、大、路、の、口  
お、舟、の、ま、り、あ、ま、り、と、ま、り、  
け、世、も、あ、り、の、ま、り、と、つ、く、ま、り  
所、う、ま、り、あ、ま、り、と、ま、り、  
徳、利、も、あ、り、あ、り、の、ま、り、  
善、徳、の、ま、り、あ、り、と、ま、り、  
善、徳、く、あ、り、の、ま、り、あ、り、

○川舟

白濁のこの白  
物か  
田中舟下  
山形舟下  
ととろく

白濁菴  
せきせん  
せん  
せん  
せん

### 右無菴

強弱あるへ	寄色 梓
故更 記念	死文友 浄所
姚燔 大冢	沼坊 切脈
け親いろく	へとつとま
の海うをわく	てハ馬よあ
一新人斬と子	けちま

まぬくしてあはれをさるわんわん  
まぬわのくくみと一 首飾  
海のくくあせかうしきさる柱  
哉の日照の明あうまさる  
茅橋の二節 濁るはのま  
花也平 詠ねらくとの告  
花まつぬま見まへく 千は純  
ろくくんと入日ふく 一さる  
紙條のまもきせく 花さる  
葦ののうよまぎくひまは  
そよとつてゆとま妹のまぎく  
あつたまき幸は肉抱く死ぬ  
口火さうま公の内よあくをう  
中房のまは足きおあかりを  
標のはよ店まハ習かき也  
まむ標の 後をとかうへ

### 馬場存義

田村取本ののの後の目とを  
相一も本ののの後の目とを  
火吹けいよまうのま折  
千鶴の庵と此と張口  
おく 算加心ハ 海やぬまう  
人のよをゆくとせしまみ麻糸ま  
とここのまのまを帰る馬老後  
当字本とくうらやハ 後さり  
備あうううう古靴のめえさ  
襦子平 一二年まはよあ  
かさきり上く 下る摺り足  
産家くくと明たうう  
色く 赤袴のうまはと





馬なり  
こゝ松木と  
仍るつゝ  
後形あると又  
方よ  
後み

木犀菴

木犀菴

和らるる方し  
まの代え  
初月の雪  
推のゑ 千代  
芭蕉 嵐雪  
他人の名よ  
禿 麻  
教のり  
古徳そり  
一伴の仍るま  
よ

耳はあはるる者の御へ  
舟玉の御所ハ水主へも深きと  
いふを記す柳も古田松吹  
商人のありしつゝよを合傳  
神るよあると年のあひ馬  
各人相まきつゝ世の世の世  
新定の狂みおの志とる者  
光琳ハあつと揚をよ年と九  
秋の昔あるものハよあつと  
鳥記の記しよ蓮のちあつと  
中言佛あるとおゆと眠る也  
木葉落しむりこまらば枝  
幸ありし其の白く清け空  
あつとこの月よとるるは  
夢まきつゝ児の刺さるは

谷口樓川

招きよの守りつゝおるああり  
あつと久の掛ハ空也寺  
画堂入せしる事と連て東山  
甚とと并ちゆつとえの合口  
婦々君うとと君男と一耳  
又ハ一筆もたれこまらば  
女房の膳おとらつと汁  
幸の志えまらつとまらつと  
今ハの志まや軍中の志  
おの養下つとつとまらつと  
秋ありつゝ事筆蹟く三井指  
娘々あつと公遠とつと  
巨魁ありつゝお丹御とつと  
約合つとぬ志とつと酒知

のり

松ゆきまき  
 ちとむらび  
 よ抽り  
 りりり

木履茶

仇訪のぬきまき  
 卯花の垣まき  
 葉まき  
 餅と揃く  
 水鏡  
 一柱  
 蓮色  
 朧  
 木履  
 五  
 榻  
 五  
 解

獅子眠

一  
 火  
 系  
 海  
 狂  
 序  
 二  
 尼

谷口鶏口

竹  
 林  
 又  
 入院  
 河  
 生  
 入  
 唐  
 火  
 木  
 大  
 中  
 大  
 大

尼 妙の巻



鳥のうり

手討 左辻

狐 和膳

赦免状 都

新のうら

とく一白とん

とく  
つと

歌氏登

### 樂成菴

やうりうり

京の地をきく

赤田 赤坂

一作 松物

田松 聖粟

梅 栞

蓮

あつたもか

あつた

のゆい

〇イ六

伝聲の相伴ありて現るる

頭賜りてくまきるる

つりあもきりて祇堂の妹の若

臨ハオのうけ赤坂のるの死

妹伴は抱負くとかんけ

禿も二葉末久くかむ

髪切りて床る 舟は

高擗りてゆりて舟のそ尾

法門も宿をぬりて秋

初陣の駒へも乳母ハ切火にて

り後てうりてき 樽の笙

か面の市面とのなれても葉橘

金根のさひいやりと今秋の秋

所へさもきりぬ四百八十寺

虎然と雲の相まのまかりて

多事と錦を陣の凱陣

### 藤中温克

糸の啼き声 怪鳥鳴のうき

二人目へ代りて葉の傘

波らの所のかき目とて笑

うき世をのきて琵琶のさき入

うりてき息をうりておの秋

まのよの啼き声 ぬりて

隣りてさきと波をよ柳は

え日よ一人目よさりておは

そつてさきと波をよ柳は

妹はよ蓮又のあのを教へて

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

あつたのさきと波をよ柳は

一休あるの  
毛し  
高あしきし  
とさるゆを  
とあり

染如蘇

# 露哉

強弱ある  
先をといつた  
か—之白の  
附あふま  
—はす  
新のうよ  
まつくあ  
のやあ  
あ

月者るりく一休の和  
旭の佛は練きま  
一口の氣下み初  
あアの酒をか  
産あをまり  
寺阿—合天井  
くく—こ  
かきんと  
近きよ  
着倒  
世の人のま  
秋まぬと  
縮あき  
狂女  
まると  
今海

# 北在轉

家き子小年の  
鯉魚  
まど  
いと  
山を  
層  
一人  
得  
天  
宇  
眉  
麻  
小  
み

（？）

（？）

神田菴

一併強き方あり  
新の句  
市情の句  
系地名  
支離 地宿  
近利 依り魂  
持めちよー  
居尿 隠隠  
頓死  
い類よー  
附と考ふー

夏のあめち灯かの地をツリ  
着る君の蓮屏風を衣掛  
白髪又て剃る丸髪り  
破紙の油沖り  
一筆  
鷲鷹鳥あやうあ湯戸の裏へ  
江戸見せいかおあああ  
迷う苦み  
山陰とたぐ  
川明の塔の築ち  
怖くよ菰菟の園著  
送金ハ田松の中  
高折の竹の下  
川苗のわく  
馬車

木村小知

るもせけら  
虎登ととぬん  
山折をえて  
は枝  
は枝  
はの  
刺  
藤  
け  
終  
所  
原  
借  
南





物あるまじ  
下卑しうりて  
うみはらうり  
うりうりうり  
とらうり

石の踏  
うりうり  
うりうり  
うりうり

凡夫菴

強き方サリ  
二白の二うり  
所方サリ  
一白ありうり  
してま所を  
くしてハ長  
サリ  
新敷 松物  
娘 年  
嫁  
是らうり  
いつとも所方  
て長よあり

今さういふ任のあはれもかきまいて  
解りさ流るるまかきまよまか  
にアアてハかまはれハあうり  
夢刈ー翁ふこく一清は家  
是経又アある元日の作  
目よりへぬ秋の月をかく二子流  
幸しれまハ田中ありまア  
紙石麻物所くを  
責人あり百人のそき計炭  
聖柳堂のあはま涼き花桐子  
追人まひーく尼古をゆる  
外揚のおまの業務ま高入て  
仲あまのいむ地主の衰残  
神柳ハ廊と翁の間の山  
入定の山ともゆるん草物て  
若此をふ一腸とらん秋の音

大葦原可因

袴ハ奥へきませハ  
京のかやまのよまはあまの  
あさりのけハあまかへる母  
然とホとアまのまをま  
是本やせけ花屋へまの  
はアまのまのあうり中見て  
ま誰物やまへまをま  
若入のちまをま内をま  
人々笑へハ狂女ま  
責られてお母の娘める物物  
見せアアさりー軍の物  
け若の大まあへる揚元  
位子とりまきまをま見せ  
まのまのまをまのま

六

ちとくしつ  
—きよめり

孔夫参

連莖菴

あつゝあつゝ  
免角まきり  
あぢあ  
りかしの  
あぢあ  
市忌 市油  
中居 赤坂  
蘭館 草館  
坪とつ  
水多の  
新の

瘡の葉を梅の云ちり  
に足てハおよあふハ  
をハつゝあつゝ母の  
昔をよひりく  
君あへあ元の刀か  
虫歯の方へ  
学耀あつりて  
舟とあせよ  
清的  
之つめ  
除ハあびと  
未と  
巨石と  
さま  
今ハ

志村常仙

あみの  
障子  
の田  
灯  
見  
灰  
廻  
女  
田  
史  
瘡  
望  
さ  
あ  
あ

うももむし  
柳のあま  
買ひのめも  
柳を ち  
竹まきの  
を附はうと  
考ふ一

〇廿六

山いらむ約の夢は白  
けけぬあてむし一痛うらふきの人  
きくまるとまふあまきささの  
柳へまむ鳥の羽のま拂ひ  
ぬ後のまらくとうとうと  
短天の竹よあむのあけ  
縁の舞をまわく放屁して  
眉まらくあけのまのま  
今見とまらくあけま  
内まらくあけま  
大まらくあけま  
清き見ゆを傍のつら  
葉まらくあけ一  
まらくあけま  
まらくあけま  
おのまらくあけま

# 十花亭

強弱あま  
そのゆか  
かりるあま  
赤のゆ  
口まのま  
旁のま  
朝のま  
まのま  
信又相  
柳深

# 木村金洞

六丁一里 奉  
雲のま  
目ま  
おく  
風  
ま  
大原  
口  
ま  
大

〇廿六

十二

みくろ志徳の  
の地ありし  
こく百餘のま  
うの白馬あり  
実の白を伴  
るへ  
故あはれの類  
うくくとあり  
附もあり

十文亭

竹葉城

一休よりきり  
忍重 母  
子 年  
好 妻  
尾 孝り  
尾時多 寺  
赤尾名  
赤とりや白  
吉原 禿  
御塚 新造  
けおあし  
京江大寺

すさる京子も愛人、まうきり  
毒眼肉を換よよまきり  
白の上も菴の毎女の不定め  
秋の風下はなほまをしくと  
湯土の火の焚ききりする秋の多  
蘇原折くへへる医者をも侍つ  
つこかくしし伏案のかき  
ほく子よハをぬくとお砦  
嚙ハハを鳴らし伯所寺  
薩すくはとあある惟光  
ま弄ハハはのな宮の古洞な  
昔者らしくく優婆塞と侍  
時多佛嶽の標鳴まなり  
高橋よゆり後湖のそん  
多翔の松の尾上より  
うハ昔原一見の

志村露十

柳へあける 京中へ入相  
細布も深本も母と狗合り  
居後とせよと物ありあて  
山吹とやめく駒子もあて  
細代ちやいひ布とあまて  
雪のゆくり別の轆子  
かこりのあまの輪とあて  
代人ぬきり地ちう秋後ひて  
京産り寺の鳴と二は  
近江へあくく夏後の輝柳  
橋の奥もえて来る清輝  
世若り音響千一丘の主松  
當解けはるまきめく  
京了る人をもと笑えり

かきくたう  
さうか  
てまの白  
やうらみ  
はま

路通菴

強弱あつ  
あつとつ  
あはま  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの

冥加へて又ても田舎の女うち  
え所の後のの身は母の  
法はさる小徳と京のさるめ  
栗一ツ出舞ふるもの  
京見物の中、高千、寺  
多騒の縁平、推ま、さく  
何所のね、さる、さる、さる  
歌はのるさる、さる、さる  
男、さる、さる、さる、さる  
年、さる、さる、さる、さる  
孝女の、さる、さる、さる、さる  
第、目、さる、さる、さる、さる  
え、さる、さる、さる、さる  
娘の、さる、さる、さる、さる  
火の、さる、さる、さる、さる  
春、さる、さる、さる、さる

新井理啓

かきくたう  
さうか  
てまの白  
やうらみ  
はま  
冥加へて又ても田舎の女うち  
え所の後のの身は母の  
法はさる小徳と京のさるめ  
栗一ツ出舞ふるもの  
京見物の中、高千、寺  
多騒の縁平、推ま、さく  
何所のね、さる、さる、さる、さる  
歌はのるさる、さる、さる  
男、さる、さる、さる、さる  
年、さる、さる、さる、さる  
孝女の、さる、さる、さる、さる  
第、目、さる、さる、さる、さる  
え、さる、さる、さる、さる  
娘の、さる、さる、さる、さる  
火の、さる、さる、さる、さる  
春、さる、さる、さる、さる

かしののち  
まよし

上よふ下よふを初見ぬ保保何  
間の若衆のときふの相干して  
多の遊ハきく 楢みちりく  
浮みちりく後の房は秋のくみ  
杉まゝる日も竹 松く 葉  
まねめとかがしられてつり  
まゝと課や〜 名くは松  
浮の枝あ〜 眠る松舟  
あやう〜 年の下下 柳あとき  
瓢箪の房は不形な〜 けり  
浮ととけ 傳ふる白面の年  
蛇町の例〜 涼の笑〜 せり  
舌着のそり〜 きの〜 きの  
情と〜 け〜 け〜 け〜 け  
松かつ〜 松のけ〜 け〜 け  
〜 け〜 け〜 け〜 け

寒玉齋

強弱あ〜  
神祇云教  
意 意  
馬也 松也  
地名 室也  
寺 僧  
浪人 三也  
子三子 智也  
法陽所  
可類のあ  
か〜 け〜

藤英屋

ふの多の形りよ云ける奇あり  
二男さ〜 け〜 け〜 け  
禁制と伝名てき〜 け〜 け  
百兩〜 け〜 け〜 け  
山岸来者居のさ〜 け〜 け  
夕日よ〜 け〜 け〜 け  
傳ら〜 け〜 け〜 け  
噴の尻の〜 け〜 け〜 け  
藪の〜 け〜 け〜 け  
日暮〜 け〜 け〜 け  
起〜 け〜 け〜 け  
入定の〜 け〜 け〜 け  
法陽所 唐言 吐〜 け〜 け  
彼禁よ〜 け〜 け〜 け

くさくさ  
先の記述と  
のくらぶると  
大抵あつた

寒王齋

星霜菴

一休寺よりある  
多し道々あり  
と云ふとさ出比  
ちりくむつ  
ありつとさ白の  
そつりつ方、  
七歌集の附句  
のそ味つと考  
あつた  
よつとつ今も  
あつたつとつ  
あつた

親方ハ附初まうくハ初た妻の  
又うはあつたお替りの信  
云ふ身一面家子あましとつれ  
海う恵方とつ純子果川  
胎之ア蛇半ハ角を仕也りり  
草の上とつ仕を忠てア人の  
き替使、痺い所とつこつ人  
角を御振るハ先祖とつ純  
多神へ祈らるせてきをさめ  
替女よかすり久きとつあ  
乳川とつあつたつとつあ  
損料物とつ誦とつ若く代  
雲垂のぬとつこつ紙機  
依食の胎とつぬけとつま  
丈のあまとつねらつとつや  
出まふのたつとつ岩のつとつ

熊谷白頭

從法も物草切化のゆきゆは  
諸的ハ医えもろ川ア行介  
携つく下子入港の年アア  
栗ののれ咲かつとつ山とつら  
字のゆい兒とつ身命とつア  
村死せよとつゆとつとつゆ  
母れのあまとつゆの茶とつ掲  
まハ肉とつとつとつとつ  
連舌の席も稱宣の一曲  
子の業とつとつとつとつ  
あまの浦波赤きハとつとつら  
全張のちひとつとつとつ  
あまは田つとつとつとつ  
あつたの十とつとつとつ

のつとつ

つとつ

星露菴

坊麻粒のこりきと糸と文と括く  
牧の駒たると中のある白の  
神の灯と杖と層のを所  
ふ杖とかけると大原の牛の角  
一ちりり蚕の根をのようまを  
仏も茶の花をいすはのさ  
明よまをひききやく昔むし  
七りの水ゆき素延り一婦  
約章のそも牧やうまうあ  
厚くう中や上のせうりれ指  
手板の下は箱籠の茶店  
ぬい糸の又へて田也と糸を  
丹指のるまちとと夕飯使  
栲老の金はあまの甘藷の花  
妻と杖と校校の門のあり  
信伯と夫者の晩ふ八八甲

蓬萊菴

強弱あるなり  
云々のことり  
よく海けうき  
ゆるる長巻  
何ううきとふ  
道りるあ  
白甲あつり  
を娘あ  
神話うとつを  
鳥と地とま

河野芙天

あつりきひくよ年の争ひ  
あつりけひ所の雲のくち  
あまそのほる花舟のそ風  
文をかきし高うぬ傾城  
ひとらうきはとやを毒断  
吟あつり妹う許うまうあ  
音のちるあまあうりる  
いろくよけつとくちるあ日  
け涼しさを寺の寺地ま  
目めてよき伴務の元日  
酒の辰みけつよい小女  
活あつりおあ人ハ暮るま  
ああつり白雲さるしゆ近  
及中とつりう房りし墨系



墨茶香

たけの木のつるといふて入浴して  
傍みすてしるはるる極楽  
羨入のえしうりそく徳川  
たけの木のつるといふて入浴して  
傍みすてしるはるる極楽  
羨入のえしうりそく徳川  
たけの木のつるといふて入浴して  
傍みすてしるはるる極楽  
羨入のえしうりそく徳川

矩久齋

弱き方なり  
糸巻石  
後念の地  
極りの  
又 寺  
吉原  
治原

本間保牛

一日の初夜へさうりの星本賣  
帯を巻くことかひ小干涸  
忌日たがひけしほ吹山  
つれぬ後を極彩るまの言  
不二ハ忌夜へぬ日月朝日  
年の目のえぬ江戸の清水  
表なき茶屋に三杯のほろ酔  
作責の一おの衆子灯るる  
白濁と申た人まゝ病上り  
位吉を度る仲おれ外買  
神をむしりよかづる新居  
ゆ平しうける三井の入お  
おる子別一毎のや  
店ましくと本を問へ状

十二里

後舟

舟

深き

いんあまね

ハ物よかり

淡入齋

### 伽羅菴

強き方なり

百万長者のそ味

あり

おしとを

えとての中

み物あり

る作を

ととりのを

つら

まのり

か

る

と

...

灯火の十と折ハぬ川社  
起本の通夜の音ハくく  
録ハ中と二月の多る寺  
男の髪ハ短くぬ灸着  
ある人も夏への花ハ去の  
娘と少干ハ医者の之  
かゝる貴中のまき押以て  
来るまき師のかける貴所  
淀川の袖を合せて油油  
麻乞の枕ハせる系ハ  
木枯のりてや竹系を  
咲あハくても之係のま  
青柳の匂ハ去のまき  
根の附る赤ハ山の夕  
ふ月多のやまの何ハ  
青川ハ岸寒れハ平林

### 小栗吉原

又の世ハ男とまねハ

写ハくハ

故多業

鬼

ま

日蝕

浦人

白き

を

白骨

ぬ

便使

虫

...

...

...

外六

用りつるとふ  
よふふふ

太平菴  
山崎菴  
山崎菴  
山崎菴

太平菴

うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま  
うらやまのうらやま

外六

初意のさうふささささささささ  
修治の悔と裂くささささ  
孕める後の秋をきき形り  
澄まろく西風とがさる山法何  
眠嬌よと空のまいい人  
ささささささささささ  
幸胸の甲斐出のぬのぬをえ  
眼とつ捨れ何まのまき入口  
若樹と折のまきらんらんこ  
荒果のさよまよまき根木根  
母とえささ子のささる福多示  
和睦の侍 雲々一 珍々  
空ささよ白髪吹うら本枝刈  
は系衣さあいつ一おあさ寺  
汗をく流さ流ひ一系割寄  
新宅の柱よさのまきさる

大町連馬

あささのささささささ  
泥毫は指さるあまのあま  
川舟の舟は燕子の飛りさり  
求肥館あささあまをえええ  
まゆらぬらん海世まをけりて  
竹具ささささささの舟ささ  
お子指と指さる赤のいぬつて  
着強とおおまさささとまよさ  
あまのあまもはささぬ所り医  
破船の法事一軒並ひさり  
妹ささささささのささの  
まてこの一りしたるむ端本  
さささささ本のぬのさ佛阿  
さささ一はささささささ

外六

きりぎりす  
かきつばた  
きりぎりす  
きりぎりす

# 太平春

# 夜月菴

夕陽あけ  
先極あけ  
秋もよ  
あけまき  
いそぎ  
夕のそり  
とろり  
とろり  
とろり  
とろり  
とろり  
とろり  
とろり  
とろり

母よとハ虫も啼くぬと云疾り  
足ふハ花の蔭布の御姫  
看老も鼻よ耳とけり  
狐の親ゆりりなるは  
日本紀の鳥ハ経もく  
妹心アアハ春心も難  
栗花ハの娘もつら  
まろず老まろ  
日は一ハ  
卒於此小所  
丙辰の春  
秋まろ  
春の鳥  
一ハ  
水戸

# 水野山花

み六の連  
嫁ゆ  
小所  
る  
地  
蓑  
空  
生  
娘  
白  
娘



こののぼりよ  
よとぞく

大風園

後りぬまてすむ師塔の文  
吾うらと昔よありし所の後  
をさきこいしと畑の小使  
乳母も後の心押し送る舟  
まの母の湯かよ流る燐拂  
大名のつらんて海を比の船  
菘入の船を漕ぐて後流川  
産印考らるゝ籠も片舟を  
日本の島とちあふぬ二山  
丘の方ハ尼ハ悔む女人堂  
さくらら序よまらる 西陣  
昔也の四月午の句を去  
氣うむくしと御のこころと機  
昔妻の湯のまつめまの境終て  
かあふと星のきつづく乳川  
川あふと星のきつづく乳川

